

武蔵野日曜集会

我は道、真理、生命

——ヨハネ伝第14章1～24節——

1995年7月2日

小池辰雄

身体からだで受けとる キリストの体現者 キリストと一つ 合体的に知る

【ヨハネ14・1～24】

『1なんじら心を騒がすな、神を信じ、また我を信ぜよ。2わが父の家には住すま処かおとし、然らずば我かねて汝らに告げしならん。われは汝等のために処ところを備えに往く。3もし往きて汝らの為に処を備えば、復きたりて汝らを我がもとに迎えん、わが居るところに汝らも居らん為なり。4汝らは我が往くところに至る道を知る』5トマス言う『主よ、何処いずこにゆき給うかを知らず、争いでその道を知らんや』6イエス彼に言い給う『われは道なり、真理まことなり、生命いのちなり、我に由らでは誰にても父の御許みもとにいたる者なし。7汝等もし我を知りたらば我が父をも知りしならん。今より汝ら之を知る、既に之を見たり』8ピリポ言う『主よ、父を我らに示し給え、然らば足れり』9イエス言い給う『ピリポ、我かく久しく汝らと偕ともに居りしに、我を知らぬか。我を見し者は父を見しなり、如何なれば「我らに父を示せ」と言うか。10我の父に居り、父の我に居給うことを信ぜぬか。わが汝等という言は已によりて語るにあらず、父われに在いまして御業をおこない給うなり。11わが言うことを信ぜよ、我は父におり、父は我に居給うなり。もし信ぜずば、我が業わざによりて信ぜよ。12誠にまことに汝らに告ぐ、我を信ずる者は我がなす業をなさん、かつ之よりも大なる業をなすべし、われ父に往けばなり。13汝らが我が名によりて願うことは、我みな之を為なさん、父、子によりて栄光を受け給わんためなり。14何事にても我が名によりて我に願わば、我これを成すべし。15汝等もし我を愛せば、我が誠命まことを守らん。16われ父に請わん、父は他に助主たすけぬしをあたえて、永遠に汝らと偕ともに居らしめ給うべし。17これは真理の御霊なり、世はこれを受くること能わず、これを見ず、また知らぬに因る。なんじらは之を知る、彼は汝らと偕ともに居り、また汝らの中に居給うべければなり。18我なんじらを遺して孤兒みなしことはせず、汝らに来るなり。19暫くせば世は復またわれを見ず、されど汝らは我を見る、われ活くれば汝らも活くべければなり。20その日には、我わが父に居り、



なんじら我に居り、われ汝らに居ることを汝ら知らん。²¹ わが誠命を保ちて之を守るものは、即ち我を愛する者なり。我を愛する者は我が父に愛せられん、我も之を愛し、之に己を顕すべし』²² イスカリオテならぬユダ言う『主よ、何故おのれを我らに顕して、世には顕し給わぬか』²³ イエス答えて言い給う『人もし我を愛せば、わが言を守らん、わが父これを愛し、かつ我等その許に來りて住処を之とともに為ん。²⁴ 我を愛せぬ者は、わが言を守らず。汝らが聞くところの言は、わが言にあらず、我を遣し給いし父の言なり。』

● 身体からだで受けとる

これは非常にねんごうな聖言ですね。「居る」とは「宿る」という言葉です。

「キリストを信ずる、」

というが、「信ずる」という言葉がどうも躓きになる。信ずるではない。

「キリストに居る、キリストの中に宿る、キリストを宿とする」

ということ。信仰という言葉が私はあまり好きではなくなりました。

「キリストの中に居る、キリストに在る」

ということ。です。

「キリスト者はキリストに在る者なり」

ということ。キリストと「如の境地にあること。です。

「われキリストのうちに、キリストわがうちに」

という内在関係が本当の「神交」で、信仰という言葉はかえってまだるっこい。観念的になる。

「私は信仰なんかありません、私はキリストに在るだけです」

と言いたいくらいです。それは、キリストが私の中に来てくださるから在れるので、こつちから在るのではない。どんな人間の中にもキリストは入っていらつしやる。それで、「に在る」ということがいえる。存在の基はキリストの側にあるので、我々の側にあるのではない。

「私の信仰はまだまだです」

なんて、そんな言い方はいらぬ。こつちの信仰なんて、そんなものはいつまでたつたつてダメなんだ。在らしめられている。太陽が在ることによって、地球は在らしめられている。地球の生きとし活けるものは太陽の光と熱で在らしめられている。それが、この在らしめるといふことです。神・キリストが、こつち側の如何にかかわらず我々を在らしめておられる。そうすると、受けとらざるを得ない。「受けとる」ということで、信仰ではない。体受する、身体からだで受けとる。それが本当のキリスト者の在り方なんだ。在らしめられている在り方です。



出エジプト記3章に、

「神モーセにいたまいけるは我は有りて在る者なり。又いたまいけるは汝かくイスラエルの子孫にいうべし、我有^{われあり}という者我をなんじらに遣したもう

と。」(出エ3・14)

とある。神が在るということは我々を、イスラエルの民を、またその個々人を在らしめている。

「その存在が在るということが周囲のものを在らしめるような在り方」

が本当の「在る」という在り方です。キリストは、

「我、なんじの足を洗わずば関わりなし」

と言われた。キリストが私たちに在る在り方は、我々の足を洗ってくださっている在り方です。即ち、罪を贖ってくださっている。罪の贖い主がキリストで、それがキリストの在る在り方です。だから、そういう意味でイエスを受けとることが父を受けとることなんです。神さまは不可解で、我々には分からない。キリストにおいてはじめて神がわかる。分かるといっても頭で分かるのではないけれども。

キリストを見て、聖書のキリストにぶつかって、本当にキリストに在らしめられていることが初めて分かると、神さまというものが分かる。神は隠れたる神なんだ、見えないんだ。

「隠れたる神」

という言い方がイザヤ書の中にある。

「救^{すくい}をほどこし給うイスラエルの神よ、まことに汝はかくれています神なり」

(イザヤ45・15)

とある。

「闇の夜に鳴かぬ鳥^{からす}の声きけば生まれぬさきの父をしぞ思う」

という、白隠の面白い歌がある。「闇の夜に鳴かぬ鳥の声を聞く」という。素晴らしいね。まっ黒い鳥は闇の夜ではなおさら分からない。しかも、鳴かない鳥の声を聞くというのだから。

「それが聞ければ、生まれぬさきのあんたのお父さんが分かるぞ」

と。

旧約に預言され、新約であらわに現れたところのイエス・キリスト、これにぶつかって初めて神というものが我々には見えてくる。

「我を見し者は父を見しなり」

とキリストが言われたのがそれです。

●キリストの体現者

『「なんじら心を騒がすな、神を信じ、また我を信ぜよ。」



「神を信じ、私を信ぜよ」とは神を体受し、私を体受せよということです。信ずるといふ言葉が躓きになるから私は使いたくない。

「キリストが神さまの子である」

という事柄を信じたつてどうにもならない。キリストそのものを受けとることです。そうすると、神さまが全存在的に納得できるようになる。

² わが父の家には住処^{すまか}おとし、然らば我かねて汝らに告げしならん。われ

は汝等のために処^{ところ}を備えに往く。

「処を備えに往く」とは天界のことをおつしやつているわけです。

³ もし往きて汝らの為に処を備えば、復きたりて汝らを我がもとに迎えん、わが居るところに汝らも居らん為なり。

まあ、そういうように仰っているけれども、我々はキリストに居るために大事な助け主がある。聖霊のことです。

「助け主を汝らに遣わす」

と書いてあるでしょ。聖霊は人格的な存在なんです。主の御霊、あるいは、御霊の主。それが聖霊です。非常に実存的なんです。

⁴ 汝らは我が往くところに至る道を知る』⁵ トマス言う『主よ、何処^{いづこ}にゆき給

うかを知らず、争^かでその道^{みち}を知らんや』⁶ イエス彼に言い給う『われは道なり、

真理^{まこと}なり、生命なり、我に由らでは誰にても父の御許にいたる者なし。

非常にはつきりした聖言です。自分は道だと。神さまからの道であり、神さまへの道です。柔道、剣道、華道、茶道と言う。日本人は道の民なんだ。「無道の道」ということを言ったのは老子です。

「われは道なり、真理なり、生命なり」

とは素晴らしい断然たる言葉です。

「私によらなければ誰も神さまの所に行けない」

と。キリストは神さまから遣^{つか}わされたひとです。「われを遣わし給いし者」という言い方もなまっています。旧約の預言者が神の言葉によって遣^{つか}わされた者です。預言者の究極の姿がイエス・キリストなんです。神の体現者です。キリストは神さまを全存在で現している。だから、

「我を見し者は父を見しなり」

と仰った。我々は

「我を見し者はキリストを見しなり」

と言えなければいけない。

「キリストとはどんな人ですか」

と聞かれたら、



「私を見て分からないか」

とはつきり言えるクリスチャンは本ものです。地上ではそこまで本当に無条件に言える人はいないでしょう。でも、これに段々近づいていく。キリストの体現者なんだ。本質的にはキリストの体現者でなければキリスト者と言えないわけです。

「私は躓いたり転んだりするけれども、しかし、私の本質はキリストだ。それが見えませんか。私に生命があるのは、愛があるのは、みなこれはキリストです」

と言えなければいかん。それを証したのはキリストの直弟子たちです。だから、直弟子の次元に入らないとね。ペテロは時々躓いているけれども、ヨハネとパウロは非常にキリストの体現的な使徒でした。ヨハネ福音書とパウロの書翰。まあ、いろいろな場合に対して自由自在に応えることのできるのはパウロだけです。パウロというのは大変な人だ。もともと、キリストに反抗していたのだから。それがダマスコ途上でひっくり返された。それで大転回してしまった。

要するに、人間は誰でも平伏して生まれつきの自分がひっくり返らないと、本ものにはなれない。

「人新たに生まれずば、神の国に入ることはできない」

とキリストが言われたのはそのことです。それでなければ神の国の民にはなれないという。

●キリストと一つ

「真理」とは観念的なものではない。非常に具体的なんです。「アレーテイア」という言葉で、「まことなるもの」ということです。

「キリストを受けると何か非常に狭いものになる」

なんて、そうではない。非常に広い。ゲエテが亡くなる二週間前に、

「私は大自然の太陽とキリストの前には無条件に平伏す」

と言った。さすがはゲエテだ。自然界の太陽と霊界のキリスト。イエスは宇宙的な魂です。

「我はアブラハムよりも先に在りしなり」

という。霊界にも初めからいた。そういうことがピシャツと言えるかただから、大変な人です。

7 汝等もし我を知りたらば我が父をも知りしならん。今より汝ら之を知る、既に之を見たり』⁸。ピリポ言う『主よ、父を我らに示し給え、然らば足れり』

なにかとんでもないことを言っているね。

9 イエス言い給う『ピリポ、我かく久しく汝らと偕に居りしに、我を知らぬか。

我を見し者は父を見しなり、如何なれば「我らに父を示せ」と言うか。

「父を見せろなんて何を言っているか。私を見て父が分からない者はいくら見せたってダメなんだ。私は父なる神の出店だ、体現者だ。私を見た者は父を見たんだ」



と。

「我を見し者はキリストを見しなり」

と、クリスチャンは——何も人にそう言う必要はありませんけれども——それだけの自覚を持つていなければダメです。キリスト者という言葉が観念的になってしまっているから人間だから不完全だ。躓いたり転んだりする。しかし、本質はキリストの体現者であるという、それだけの自信ならざる自信をもっていないとね。それはキリストの力を、光を、愛を、生命を受けていれば、言えるわけです。

10 我の父に居り、父の我に居給うことを信ぜぬか。

私は神さまと一つではないか、それが見えないのかと。我々の自覚は——なにも表現する必要はないけれども——

「キリストと一つであるのが自分の存在だ、在らしめられているんだ」

ということですよ。太陽が在ることが生きとし活ける者を在らしめているように、キリストの在り方は我々を在らしめている。もう、無条件に

「ありがとうございます」

の他に言い方がない。

わが汝等という言は己によりて語るにあらず、父われに在^{いま}して御業^{みわざ}をおこな
い給うなり。

私のしていることは父の力でやっている。自分で一人でやっているのではないと。

11 わが言うことを信ぜよ（受けとれ）、我は父にあり、父は我に居給うなり。

もし信ぜずば（受けとらないならば）、我が業によりて信ぜよ（受けとれ）。

「我は父にあり、父は我に居給う」

という内在関係です。受けとらないならば、私の業を受けとりなさいと。

12 誠にまことに汝らに告ぐ、我を信ずる者は我がなす業^{わざ}をなさん、かつ之よ

りも大なる業をなすべし、われ父に往けばなり。

そうだよ、キリストの力でやるのだからね。こういうところを文字通りの訳をすると、読む人がみな本当のところを捕まえない。私が今告白しているように、「信ずる」なんていう言葉は要らない。「受けとる」でいい。身体^{からだ}で受けとるんだ。

「私を体受するものは、身体で受けとる者はわが業をなす」

という。キリストの業と同質の業ができるためには、キリストの中にいなければダメです。これは言うまでもないことです。「愛する」とは人助けをするということです。キリストの中にいなければ、本当の人助けはできない。

教会であろうと無教会であろうと、またカトリックであろうとプロテスタントであろうと、何であつてもいい。相対的な判断をしていたらダメです。問題はキリストと直結しているかということだけです。



「あなたはキリストに直結してますか」
と、それだけです。その仲介は何もいらぬ。アッシジのフランチェスコを読んで、私はフランチェスコという人は素晴らしい人だなと思つた。彼は全くキリストに直結していた魂でした。ローマ法王といえども何も恐れぬ。

●合体的に知る

13 汝らが我が名によりて願うことは、我みな之を為さん、父、子によりて栄光を受け給わんためなり。

この「我が名によりて」という訳はよくない。「我が名に在りて」なんです。「名の中に在りて、名の中で」ということです。

「父、子に在りて、栄光を受け給わんためなり」

です。「によりて」というと、なにか手段方法みたいだ。そうではない。「に在りて」です。こういう訳は本当は改訳しなければいけない。

14 何事にも我が名によりて我に願わば、我これを成すべし。15 汝等もし我を愛せば、我が誠命を守らん。16 われ父に請わん、父は他に助主をあたえて、永遠に汝らと偕に居らしめ給うべし。

聖霊のことはむしろ「助主」と言つた方がいくらいです。

17 これは真理の御霊なり、

神の真理を現すところの御霊である、聖霊である。

世はこれを受くること能わず、これを見ず、また知らぬに因る。なんじらは之を知る、

合体的に知っているということです。「知る」という言葉は旧約からあるが、ユダヤ人の「知る」という言葉は頭で知るのではなく、「全存在で受けとる」ことを「知る」という。認識するのではない。非常に実存的、合体的です。

彼は汝らと偕に居り、また汝らの中に居給うべければなり。18 我なんじらを遺して孤児とはせず、汝らに来るなり。19 暫くせば世は復われを見ず、されど汝らは我を見る、われ活くれば汝らも活くべければなり。20 その日には、我わが父に居り、なんじら我に居り、われ汝らに居ることを汝ら知らん。21 わが誠命を保ちて之を守るものは、即ち我を愛する者なり。我を愛する者は我が父に愛せられん、我も之を愛し、之に己を顕すべし』

「我を愛する」

とは、実存的にキリストを愛するので、これは感情的に愛するのではない。

「誠命を保ちて之を守る」

ためには、実は我（キリスト）と心も魂も一つになっている——それが「愛する」です——



者でなければ業はできない。むしろ、業の方は結果ですから。

「私と一つになっている者は、愛する者は、わが父に愛せられる」

と、その通りです。

22 イスカリオテならぬユダ言う『主よ、何故おのれを我らに顕して、世には

顕し給わぬか』²³ イエス答えて言い給う『人もし我を愛せば、わが言を守らん、

わが父これを受し、かつ我等その許に來りて任処を之とともに為ん。

「任処を之とともに為ん」

というところに、「の中にいる」という気持が出ている。

24 我を愛せぬ者は、わが言を守らず。汝らが聞くところの言は、わが言にあ

らず、我を遣し給いし父の言なり。

はいその通り。

「自分が勝手に自分で考えて言っているのではない。父の言葉を私は受けとつてい

るだけのなした」

と。だから、イエスというひとはどこまでも神さま中心で、そして、神さまの体現者であり表現者である。キリストは父なる神一切だから、キリストは「無者」なんだ。イエスは何も無い。本当の無者が「無限無量者」になる。この無限無量なるものは父なる神ですから。父なる神を現しているキリストは本質的には無限無量者なんです。自由自在なんだ。自由自在というの、自分に全然とらわれないこと、我が無い。無我なる人が本当の自由自在なんだ。我に捕らわれているのはちつとも自由自在ではない。キリストは

「我何ごとも為しあたわず」

なんだ。ところが、「何ごとも為しあたわず」という、このキリストが何でもやった。それは神さまの力でやった。宗教的真理というものは、そういった逆説的な言葉で表さざるを得ない。

人間の道德の世界では限度がある、行き詰まる。知識と道德では行き詰まってしまふ。知に絶し、いわゆる道德に絶しないと、その次の世界には入れない。その次の世界に入ると、今度はその相対的なものを自由自在に使うことができる。だから、大学の学問というのは、大体頭の学問でダメなんだ、ただ知的なんだ。大学の教授はもうひとつ奥の世界を知らなければ、本当は教えることができないわけだ。

